

2025 年度 早稲田大学大学院教育学研究科修士課程入学試験問題訂正

《一般入試 外国学生入試 専門科目》

【国語教育専攻】

【選択七】

8 ページ ㊦ 設問二

＜誤＞ 傍線②「其所・・・・・・・・餘烈」

＜正＞ 傍線②「人為動物・・・・・・・・之所不能」

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目】 【国語教育専攻】

解答上の注意

- 一. 国語教育専攻の入学試験問題は、「専門科目・選択」（配点60％）と「専門科目・共通」（配点40％）とに分かれています。
- ①「専門科目・選択」は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（選択一〜選択八）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	「専門科目・選択」で 解答すべき問題
国語科教育研究指導	幸田 国広	選択一 国語教育
国語科教育研究指導	菊野 雅之	
日本語学研究指導	松本 正恵	選択二 日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	松本 直樹	選択三 古典文学 I 上代文学
国文学研究指導	新美 哲彦	選択四 古典文学 II 中古文学
国文学研究指導	福家 俊幸	
国文学研究指導	海野 圭介	選択五 古典文学 III 中世文学
国文学研究指導	田淵 句美子	
国文学研究指導	天野 聡一	選択六 古典文学 IV 近世文学
国文学研究指導	内山 精也	選択七 中国古典文学
国文学研究指導	金井 景子	
国文学研究指導	五味渕 典嗣	選択八 近代文学
国文学研究指導	和田 敦彦	

②「専門科目・共通」は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（共通A〜Dのいずれか一問）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	「専門科目・共通」で 解答すべき問題
日本語学研究指導	松本 正恵	共通A 日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	内山 精也	共通B 中国古典文学
国文学研究指導	金井 景子	共通C 近代文学
国文学研究指導	五味渕 典嗣	共通D 近代文学
国文学研究指導	和田 敦彦	共通E 近代文学

- 二. 解答用紙は、「問題番号」ごとに一枚使用すること。全ての解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名、ならびに「問題番号」（例「選択八」・「共通A」など）を必ず記入すること。
- 三. 解答用紙のホッチキスは、はずさないこと。また、無解答の解答用紙でも提出すること。
- 四. 問題用紙は「十七枚」（本ページ含む）、解答用紙は「二枚」です。必ず枚数を確認すること。

以上

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

「 選択一 」 国語教育

※解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次のA～Hのうちから三題を選び、それぞれ簡潔に説明しなさい。

- | | |
|-------------------|-----------------|
| A 「情報の扱い方」に関する事項 | B 大学入学共通テスト「国語」 |
| C 大村はま | D 伝統的な言語文化 |
| E 指導と評価の一体化 | F 学習過程の明確化 |
| G 「読むこと」における精査・解釈 | H 主体的に学習に取り組む態度 |

二、次のI～Nのうちから二題を選び、具体的に論じなさい。

- | |
|-----------------------------|
| I 益田勝実の古典教育論の特徴 |
| J 学習指導要領国語編試案(昭和二十二年)の性格や特徴 |
| K 高校国語科選択科目「文学国語」と「論理国語」の性格 |
| L 全国学力・学習状況調査 |
| M 西尾実と時枝誠記による文学教育・言語教育論争 |
| N PISA型読解力の特徴 |

三、教員が行う教材研究の方法について、具体的な教材(作品)を取り上げた上で、多角的に述べなさい。

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択二〕 日本語学

一 次のA～Lの事項のうちから四題を選び、説明しなさい。

(解答の際には、選択した問題番号を明記すること。)

A	役割語	B	テンス	C	松下大三郎
D	宣命体	E	四つ仮名	F	『和名類聚抄』
G	形態素	H	語種	I	不変化助動詞
J	新方言	K	謙讓語	L	コース・デザイン

二 次のM～Oのうちから一題を選び、具体的に論じなさい。

(解答の際には、選択した問題番号を明記すること。)

- M 日本語書記法の歴史と問題点について
N 古代語から現代語への、日本語動詞の活用体系の変遷について
O 国語教育・日本語教育における文法のありかたについて

三 日本語学が研究対象としている範囲・分野について、専門外の人にもわかりやすいように、具体例を交えながら説明しなさい。その際、研究方法や隣接領域にも触れ、日本語学研究の意義が明確になるように論じなさい。

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択二〕 古典文学（I） 上代文学問題

一、次の（A）～（D）のうちから、二題を選択して論述しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- （A）『古事記』の表記体（文体）
- （B）記紀神話
- （C）「古老相伝旧聞異事」
- （D）『万葉集』の三大部立

二、次の（E）～（K）のうちから、三題を選択して簡潔に（一題あたり解答用紙五行程度）説明しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- | | | | |
|---------|----------|--------------|--------|
| （E）磐姫皇后 | （F）柿本人麻呂 | （G）歌垣 | （H）国見歌 |
| （I）黄泉国 | （J）倭武天皇 | （K）ハイヌヴェレ型神話 | |

三、上代文学作品の享受史を踏まえ、その国語科教材としての意義と可能性について、具体的かつ簡潔に（解答用紙一〇行以内）考えを述べなさい。

（上代文学問題 以上）

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択 四〕 古典文学（Ⅱ） 中古文学

解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次の(A)～(D)のうち、二題を選択して論述せよ。

- (A) 平安時代の仮名日記と家集との関係
- (B) 『枕草子』の特質
- (C) 紫式部の出仕と『源氏物語』の成立
- (D) 『源氏物語』の諸本研究の意義

二、次の(E)～(M)のうち三題を選択して、簡潔に説明せよ。

- (E) 『篁物語』
- (F) 『伊勢集』
- (G) 『狭衣物語』
- (H) 『大鏡』
- (I) 『蜻蛉日記』
- (J) 『とりかへばや物語』
- (K) 藤原定子
- (L) 伝承世界と平安時代の物語
- (M) 平安時代の文学における女房の役割

三、中古文学を学校教育で学ぶ意義とは何か、あなたの考えを述べよ。

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択五〕 古典文学（Ⅲ） 中世文学

※解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次の①～⑧の中から二題を選択して、詳しく論述しなさい。

- ① 説話文学の生成と展開について
- ② 軍記の生成と展開について
- ③ 勅撰和歌集と歌道家について
- ④ 中世における物語享受について
- ⑤ 絵巻・お伽草紙等の絵のある文学について
- ⑥ 古今伝受と中世の古典学・古典注釈について
- ⑦ 幼学書と中世の学問について
- ⑧ 文学研究と書誌学研究について

二、次の①～⑩の中から三題を選択して、簡潔に説明しなさい。

- ① 今昔物語集
- ② 古来風体抄
- ③ 物語二百番歌合
- ④ 毎月抄
- ⑤ 撰集抄
- ⑥ 和歌知願集
- ⑦ とはすがたり
- ⑧ 徒然草
- ⑨ 職人歌合
- ⑩ 道成寺縁起

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【専門科目・選択】 【国語教育専攻】

〔選択六〕 古典文学（Ⅳ） 近世文学

一、次の①～④の中から二題を選択して、文学史的な視座から詳しく論述しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- ① 近世期における書籍の出版・流通について
- ② 近世期における政治改革と文学との関わりについて
- ③ 近世期における雅文学と俗文学について
- ④ 近世期における『源氏物語』研究の変遷について

二、次の①～⑦の中から三題を選択して、文学史的な視座から簡潔に（一題あたり解答用紙五行以内）説明しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- ① 徳川光圀
- ② 赤穂事件
- ③ 『にひまなび』
- ④ 江戸堂上派武家歌壇
- ⑤ 天明の京都大火
- ⑥ 『春雨物語』
- ⑦ 『椿説弓張月』

三、近世文学を学校教育で学ぶ意義について、具体的かつ簡潔に（解答用紙一〇行以内）考えを述べなさい。

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
 修士課程 一般・外国学生入学試験問題
 「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択七〕 中国古典文学 問題

〔一〕 次の文は、北宋・歐陽脩「秋声賦」の一節である。この文を読んで、設問に答えなさい。

歐陽子方夜讀書、聞有聲自西南來者。悚然而聽之曰、「異哉。初淅瀝以蕭颯、忽奔騰而砰湃。如波濤夜驚、風雨驟至。其觸於物也、鏦鏦錚錚、金鐵皆鳴。又如赴敵之兵、銜枚疾走、不聞號令、但聞人馬之行聲。」予謂童子、「此何聲也。汝出視之。」童子曰、「星月皎潔、明河在天。四無人聲、聲在樹間。」予曰、「噫嘻、悲哉。此秋聲也。胡爲而來哉」。蓋夫秋之爲狀也、其色慘澹、煙霏雲斂。其容清明、天高日晶。其氣慄冽、砭人肌骨。其意蕭條、山川寂寥。故其爲聲也、淒淒切切、呼號憤發。豐草綠縹而爭茂、佳木蔥籠而可悅。草拂之而色變、木遭之而葉脫。其所以摧敗零落者、乃其一氣之餘烈。……中略……嗟乎、草木無情、有時飄零。人爲動物、惟物之靈。百憂感其心、萬事勞其形。有動於中、必搖其精。而況思其力之所不及、憂其智之所不能。宜其渥然丹者爲槁木、黝然黑者爲星星。奈何以非金石之質、欲與草木而爭榮。念誰爲之戕賊、亦何恨乎秋聲。童子莫對、垂頭而睡。但聞四壁蟲聲唧唧、如助予之歎息。

〔設問一〕 傍線①「予謂……來哉」を、口語訳しなさい。

〔設問二〕 傍線②「其所……餘烈」を、口語訳しなさい。

〔設問三〕 傍線③「童子……歎息」について、(A)・(B)二つの問いに答えなさい。

(A) 書き下し文、もしくは現代中国語の発音記号(拼音)表記に改めよ。

(B) 口語訳しなさい。

〔設問四〕 右の文は、「賦」という文体である。この文体の特徴を簡潔に記しなさい。

〔二〕 次のア～オの中から一つを選択し、その記号を解答欄に記した上で、説明ならびにあなたの考えを記しなさい。

ア 古体詩と近体詩の相違について

イ 詩と詞の相違について

ウ 文言小説と白話小説の相違について

エ 「漢文」が「国語」に含まれる理由について

オ 日本漢詩文の、国語教材としての意味について

〔三〕 次の(A)～(J)の中から三つの項目を選び、それぞれの文学史ないしは文化史的意味を中心に説明しなさい。

- | | | | |
|------------|--------------|-------------|-----------------|
| (A) 毛伝鄭箋 | (B) 曹丕「典論論文」 | (C) 子不語怪力乱神 | (D) 王孟韋柳 |
| (E) 郊寒島瘦 | (F) 韓柳の文 | (G) 蘇黄 | (H) 范成大「四時田園雜興」 |
| (I) 『聊齋志異』 | (J) 『儒林外史』 | | |

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

「選択Ⅷ 近代文学」

一 日本の近代文学と戦争という観点から、あなたの考えるところを述べなさい。

二次の(A)と(E)の中から一題を選択して論じなさい。

- (A) 家庭小説について
- (B) 近代文学と大逆事件について
- (C) 農民文学について
- (D) 「宣言一つ」論争について
- (E) 構造主義と文学研究について

三次の(A)と(G)の中から三題を選択して説明しなさい。

(「」は作品名、『』は雑誌名を示す)

- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| (A) 「高野聖」 | (B) 「生活の探求」 | (C) 永井荷風 |
| (D) 宮本百合子 | (E) 『種蒔く人』 | (F) 『新青年』 |
| (G) 第三の新人 | | |

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目・共通】
【国語教育専攻】

〔共通A〕 日本語学（含日本語教育） 松木正恵

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文は横書きのため、①～④の順に読みなさい。）

たとえば、

- (1) 彼は軽々と荷物を持ち上げた。
- (2) お母さんは洗剤で丁寧に食器を洗っています。
- (3) 今さらジタバタ騒いでも無駄だ。
- (4) 彼はボロボロに破れた服を着ていた。
- (5) あの頃彼によく会った。
- (6) 時々彼はカマキリのように痩せた。

の下線部分について言えば、これらは、従来、総て、情態副詞で形成されている成分とされ、言表事態の中で働いているものの、3(1)から(4)と、(5)(6)とでは、動詞に対する意味—統語的な働きに異なった所がある。

(中略)

あり方の副詞と頻度の副詞は、ともに言表事態の層で機能するとは言うものの、細かく見れば、それが作用する層・レベルが違う。頻度の副詞の作用する層は、あり方の副詞を包み込んだ層である。あり方の副詞が、動詞の語義の示す動作や変化そのものの成立、といった層・レベルで働くのに対して、頻度の副詞は、それを包み込んだ外側の層・レベルで働く。

あり方の副詞と頻度の副詞のこの作用域の違いは、アスペクトの現象の上にも明確に表れている。よく知られているように、アスペクトを表すテイル形は、それが、どういったタイプの語義を有した動詞に付くかによって、そのアスペクト的意味の現れを異にする。

- (7) 子供が庭で遊んでいる。
- (8) 喉がカラカラに乾いている。

(7)のように、過程を有する主体運動の動詞に付けば、< A >を表し、(8)のように、主体変化を示す動詞に付けば、< B >を表す。(中略)つまり、テイル形のアスペクト的意味の現れは、動詞の語義の表す動きの質に規定されている。動きの質が変われば、テイル形のアスペクト的意味の現れも変化する。

(中略)

あり方の副詞には、少なくとも二種の意味—統語的に異なった下位類が存在する。

- (9) 彼は答案用紙をピリッと破った。(13) 上着がボロボロに破れた。
- (10) 彼は丁寧に字を書いている。(14) 彼はきれいに字を書いた。
- (11) 留金がプチンと外れた。(15) ネックレスがバラバラに外れた。
- (12) その男はノロノロ立ち上がった。(16) 洗剤で手がガサガサに荒れた。

(中略)

あり方の副詞として一括できはするものの、4(9)から(12)までと(13)から(16)までは、意味—統語的に少しばかり異なった所を有している。

① 語が有している語義(Lexical Meaning)とその語が示す文法的な振る舞い方(Syntactic Behavior)とは、従来考えられていたほど無関係な存在ではない。語がどういった文法的な振る舞い方—語の結合能力のあり方や語の形態論的な特徴—をするかは、その語がどういった語義を有しているかに密接に関わっている。密接に関わっているだけでなく、その語にそういった文法的な振る舞い方の存することの基因が、その語の有している語義のあり方にある、といったこともまた少なくない。語義と文法的な振る舞い方との間に密接な関係が存することから、文法記述をより包括的により明示的に行うためには、語の有している語義にも十分注意を払う必要がある、といった帰結が導き出されてくる。これが筆者の《語彙論的統語論》である。

(中略)

こういった語彙論的統語分析がうまく行きにくい、すなわちなかなか困難である領域の一つに、副詞がある。これは、副詞と対手たる主要成分との結合、共起には自由度が高い、言い換えれば、副詞の、対手たる主要成分に対する従属度が低いことによって、対手たる主要成分あるいは副詞に、共起関係のあり方をあらかじめ十全に指定しておくことが、なかなか困難であることから来ている。

(中略)

副詞的修飾成分は、統語論のはきだめ的存在であるが、情態副詞成分は、特にその感が強い。程度副詞・陳述副詞以外のものは、総て情態副詞に組み入れられる、といったことを受けて、情態副詞成分は、まとまりを欠いた雑多なものになってしまっている。たとえば、「ツイニ完成シタ」「突然立ち上ガッタ」「タビタビ来ル」「ニッコリ笑ッタ」などの下線部分は、総て情態副詞成分とされるが、それぞれ、意味—統語的にかなり異なった存在であろう。文法記述のきめの細かさの拡大を計ろうとすれば、こういったものも、それぞれの位置に的確に位置づけてやるが必要になる。

文は、大雑把に言って、2言表態度が言表事態を包んで、有る、といった層的構造を有している。文が層的構造を取って存する、といったことを受けて、副詞の作用域にもレベルの違いが存在する。作用域の点から、副詞には大きく言表態度の層で働くものと言表事態の層で働くものがある。情態副詞成分は、基本的に程度副詞成分とともに言表事態の中で働く(もっとも言表事態の成分と言表態度の成分との間の移行過程にあるものや、言表事態の成分として働きながら、言表態度のニュアンスを付け加える、といったものがないわけではない)。情態副詞成分は、言表事態の層で働く副詞的修飾成分である、といった位置づけには不都合はない。しかし、不都合はないものの、これだけでは粗くて不十分である。

3

(中略)

以上、あり方の副詞には、少なくとも、意味—統語的に少しばかり異なった様態の副詞と結果の副詞とが存することを見てきた。

(中略)

筆者が、結果の副詞を様態の副詞から特立する最も中心的な理由は、結果の副詞を取りうる動詞には明確な制限が存在する、というところにある。以下、結果の副詞を取りうる動詞がどのようなものであり、取りえない動詞がどのようなものであるかを見ていく。

まず、対象に対して、結果の状態を述べることになるもの、つまり他動詞から見ていく。＜まともな受身＞を形成する他動詞の中には、対象への主体の働きかけが、対象の状態変化を引き起こし、それを対象に残す、といったあり方を取るものと、主体は対象に働きかけるが、その働きかけによって、対象は必ずしも状態を変化させることを必要としないものがある。たとえば、「切り裂ク」を例に取れば、主体の「切り裂ク」という対象への働きかけは、対象を切り裂かれた状態に変化させてしまう。それに対して、「殴ル」の場合は、主体の対象への「殴ル」といった働きかけは、その結果として対象の状態変化を必ずしも引き起こすわけではない。前者「切り裂ク」は、対象の状態変化を引き起こす他動詞であり、後者「殴ル」は、対象の状態変化を引き起こすことを必要としない他動詞である。「切り裂ク」は、次の例が示すように、結果の副詞を取りうる。

(17) 女は布をズタズタに切り裂いた。

切り裂れた布が、ずたずたの状態になっているのである。(17)は「切り裂カレテ、布ガズタズタニナッタ」を含意している。「ズタズタニ」は、直接的には動きの結果の対象の状態を示し、そのことによって、切り裂き方を表したものである。本章で結果の副詞としたものに当たる。それに対して、

(18) 男が通行人を{激しく／ボカボカ／ボカボカニ}殴っている。

の「激シク」「ボカボカ」「ボカボカニ」は、いずれも、対象の状態について述べたものではない。この場合は、「*殴ラレタ通行人ハ激シクダ」「*殴ラレタ通行人ハボカボカダ」「*殴ラレタ通行人ハボカボカニダ」といった関係が成立していない。「激シク」や「ボカボカ」や「ボカボカニ」は、「殴ル」といった動き自身に内属している側面の様子である。したがって、これらは様態の副詞である。「殴ル」は、結果の副詞を取ることはないと思われる。

(中略)

これらは、双方とも主体運動を表す動詞であるから、能動態でテイル形を取って動きの最中を表す。

- | | |
|-------------------|------------------|
| (19) 太郎は机を壊している。 | (19') 机が壊されている。 |
| (20) 男が壁を汚している。 | (20') 壁が汚されている。 |
| (21) 太郎が次郎を蹴っている。 | (21') 次郎が殴られている。 |
| (22) 小犬が花子を咬んでいる。 | (22') 花子が咬まれている。 |

4

(19)、(20)が結果の副詞を取る他動詞の例である。(21)、(22)が結果の副詞を取らない他動詞の例である。例文が示すように、ともに、テイル形は動きの最中として解釈される。しかしながら、受身化によって、対象が主体の位置に持ってこられた場合、テイル形の preferd reading が異なってくる。

結果の副詞を取る他動詞の例、(19)、(20)は、受身化されれば(特に動作主が表現されていない時は)、結果状態の持続として解釈される傾向にあるが、結果の副詞を取らない他動詞は、(21)、(22)が示すように、やはり動きの最中である。これは、結果の副詞を取る他動詞は、対象の状態変化を来たすものであることから、受身化で対象が主体の位置に立つことにより、「主体運動の動詞」であったものが、「主体変化の動詞」化する、ことによる。それに対して、結果の副詞を取らない他動詞は、対象の状態が変化しないのであるから、受身化されようが、やはり主体運動の動詞のままで残る。

(中略)

結果の副詞については、動詞との共起関係のあり方を動詞に指定しておくことが可能であった。これは、結果の副詞が、共起関係においてそれだけ動詞と密接な存在であることを示している。結果の副詞と＜着点＞を表す共演成分には、つながり連続していくところが有る。様変えの動詞は、

(23) 彼は棒を(真っ黒に)焦がした。

(24) 母は部屋を(きれいに)飾った。

のように、通例、結果の副詞は取りうるものの、着点を必要としない。ところが、様変えの動詞の中には、

(25) 作業員は液体の酸性を中性に戻した。

(26) 父は扉を板扉からブロック扉に変えた。

のように、着点を取らないと意味的に充足しないものがある。このことから着点を表す共演成分と近い関係にある結果の副詞が、動詞の意味の充足にとって、必要度の高い存在であることが分かる。

また、着点を表す共演成分と結果の副詞の近さは

(27) 父は息子を医者_ニに育てた。

(28) 母は女手一つで息子を立派_ニに育てた。

のような例によっても、十分分かる。 (27)の「医者ニ」は着点的である(28)は「息子ヲ医者ニシタ」に近い)のに対して、(28)の「立派ニ」は結果の副詞的である。同じ動詞が、極めて近い意味と用い方で、着点と結果の副詞の双方を出現せざるのは、着点と結果の副詞が近いところに位置しているからであろう。

7

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

修士課程 外国学生入学試験問題

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目・共通】 【国語教育専攻】

問1 下線部1「筆者の《語彙論的統語論》」とあるが、この筆者は誰か。氏名を答えなさい。

問2 下線部2「言表態度が言表事態を包んで、有る、といった層的構造」とあるが、具体的にどのような構造のことを言っているのか。「言表事態」「言表態度」の包接関係だけでなく、両者それぞれの内部構造を構成する文法カテゴリーの層状構造にも着目して詳しく説明しなさい。

問3 下線部3「(1)から(4)と、(5)(6)とでは、動詞に対する意味・統語的な働きに異なった所がある」とあるが、(1)～(6)の各例文について「情態副詞」の働きを具体的に解説した上で、「(1)から(4)」と「(5)(6)」の両者の違いを説明しなさい。

問4 括弧へAへBへにそれぞれふさわしい術語（文法用語）を入れなさい。

問5 下線部4「(9)から(12)までと(13)から(16)までは、意味・統語的に少しばかり異なった所を有している」とあるが、(9)～(16)の各例文について「あり方の副詞」の働きを具体的に解説した上で、「(9)から(12)」と「(13)から(16)」の両者の違いを説明しなさい。

問6 下線部5「結果の副詞を取る他動詞・下線部6「結果の副詞を取らない他動詞」に当てはまる具体例な動詞を、それぞれ5語ずつ挙げなさい。（本文中で扱われている動詞を除く。）

問7 下線部7「着点と結果の副詞が近いところに位置している」とあるが、動詞の必須格・任意格のあり方とその連続性にも触れながら、動詞の格成分と副詞的修飾成分との関係性について論じなさい。

問8 下線部1「筆者の《語彙論的統語論》」とあったが、この筆者の「語彙論的統語論」の考え方が、この本文中のテーマに関しては具体的にどのような実現されていたと思うか。その意義を含めて自分の考えをまとめなさい。

以上

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科 修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」 【国語教育専攻】

〔共通B〕 中国古典文学（内山 精也）

次の文章（松浦友久著）「美のかたち」としての主要定型」を読み、後の問いに答えなさい。

詩人にその性格や個性があるように、詩型にもその性格や個性がある。

たとえば、同じ「恋」や「別れ」をうたつていても、短歌でうたうか、俳句でうたうかによって、その詩的な感覚や情緒には、かなりはつきりした相違が生まれることに気がつく。つまり、「五七五七七」と「五七五」とは、たんに **a** な相違ではなく、**b** ・性格的な相違を生むのである。これはまさに、「かたち」が「こころ」に働きかける大きな作用（機能）といえるだろう。

短歌や俳句がそれぞれ詩型としての個性をもっているように、漢詩の絶句や律詩や古体詩も、それぞれの個性をもっている。しかも、漢詩の詩型は、四言・五言・七言・雑言などのように、詩句の長短によつて、さらにリズム的に区分されている。このため、五音と七音の組み合わせだけを基本とする短歌や俳句よりも、詩型としての個性は、いっそう明確であるといつてよい。

例えば、「短歌」の五七五七七、「俳句」の五七五、あるいは「絶句」の五言四句・七言四句、「律詩」の五言八句・七言八句など——いずれも、千数百年から数百年の長い歴史を生き抜いてきた日・中詩歌の主要定型である。この場合、われわれが見逃してはならない最も大事な点は、以下の事実であろう。すなわち、これらの主要な定型詩が形成され継承されてきたのは、いかなる権力者が強制した結果でもない。また、何らの法律・道徳・宗教等が強制した結果でもない。それはひとえに、その言語の性格に即したさまざまな試みのなかで、最も自然で美しいと感じられる言語形式が選択され、その言語を母語とする人々の共通の美的感覚に支えられつつ、長い時間をへて今日に至っている、という事実である。共通の美感に支持されない詩型は、たとえ一時的に流行したとしても、その継承性は明らかに乏しい。

この意味において、長く各国詩歌史を代表するいくつかの主要定型は、真にその言語の特色——音声的・発想的特色——に合致した根源的なものと考えられよう。したがって、それはいわば、その言語における「美のかたち」として存在しているのだといつてよい。美術や音楽や建築にそれぞれ美のかたちがあるように、詩歌にも言語によつて構成される「美のかたち」があることはいうまでもないからである。

ただここで、もうひとつ見逃されてはならない点がある。それは、「美のかたち」としての主要定型は、——その言語の本質や特色に合致した感性的な選択の結果であるがゆえに——たんに「静的な美のかたち」として機能しているだけでなく、その言語の抒情表現に最もふさわしい「動的な美のかたち」としても機能している、という事実である。つまり、その主要定型による限り、作者も読者も、そこに集約的に充たされた当該言語の「気（生氣）の流れ」によつて、一定の表現の生命力ダイナミズムへの実感が保証されている、という効果をもつ。通時的に見て、いわゆる「自由詩」も「散文詩」も、こうした主要定型への「補完」ないしは「反措定」として位置づけられるのが、各国詩歌史の実態であるといつてよい。この意味で、主要定型が確立・機能してない詩歌史にあつては、自由詩や散文詩への試行の成果も、その洗練・鍛錬の程度はかえつて不十分だといわざるをえないであろう。

〔問一〕 空欄 a・b には、漢字二字の対義語が入る。それぞれに最もふさわしい語を解答用紙に楷書で記しなさい。

〔問二〕 傍線「動的な美のかたち」とは、どういうことか。本文の内容に即して説明せよ。

〔問三〕 この文は、各国詩歌史における定型詩の、二つの重要性について説明している。その二つを簡潔に要約せよ。

〔問四〕 中国の「新詩」について、「旧体詩」（本文にいう「主要定型」）と比較しつつ、あなたの考えを簡潔に述べなさい。（以上）

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」 【国語教育専攻】

【共通C】近代文学（金井）

次に示すのは、樋口一葉の『たけくらべ』（一八九六年）の末尾の文章である。これを読んで、以下の問いに答えなさい。

問一 どのようなことが描かれているか、概要をまとめなさい。

問二 この作品に関して、激賞した三名の文学者たちの氏名を記しなさい。

美登利はかの日を始めて生れかはりし様の身の振舞、用ある折は廊の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひに行けば今に今にと空約束はてし無く、さしにも中よし成けれど正太とさへに親しまず、いつも耻かし氣に顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難く成ける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむも有れども母親一人は笑みては、今にお俠の本性は現れまする、これは中休みと子細ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜な／＼の弓張提燈、あれは日かげの集めとするく土手を行く影そよる寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽では聞えぬ。

〔龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出る〕風説をも美登利は絶えて聞かざりき、有し意地をば其まゝに封じ込めて、此処しばらくの怪しの現象に我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かしうのみ有けるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有けり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪さしに入れて淋しく清き姿をめけるが、聞くともふしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林に袖の色かへぬべき當日なりしとぞ。

（終）

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

【共通D】近代文学（五味渚）

次に示すのは、夏目漱石「倫敦塔」（『帝国文学』一九〇五年一月）の冒頭部分である。文章を読み、あと
の問いに答えなさい（表記は現行のものに改めている）。

二年の留学中ただ一度倫敦塔を見物した事がある。その後再び行こうと思った日もあるがやめにした。人から誘われた
事もあるが断わった。一度で得た記憶を二返目に打壊すのは惜い、三たび目に拭い去るのは尤も残念だ。「塔」の見物は
一度に限ると思う。

行ったのは着後間もないうちの事である。その頃は方角もよく分らんし、地理などは固より知らん。まるで御殿場の兎
が急に日本橋の真中へ抛り出されたような心持ちであつた。表へ出れば人の波にさらわれるかと思ひ、家に帰れば汽車が
自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。この響き、この群集の中に二年住んでいたらわが神経の織
維も遂には鍋の中の麴海苔の如くべとべとになるだろうとマクス・ノルダウの『退化論』を今更の如く大真理と思ふ折さ
えあつた。

しかも余は他の日本人のごとく紹介状を持つて世話になりに行く宛もなく、また在留の旧知としては無論ない身の上であ
るから、恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物のためもしくは用達のため出あるかねばならなかつた。無論汽車へ
は乗らない、馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用しようとする、どこへ連れて行かれるか分らない。この広い倫
敦を蜘蛛十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何らの便宜をも与える事が出来なかつた。余はやむ
を得ないから四ツ角へ出るたびに地図を抜いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に
聞く、人に聞いて知れぬ時は巡查を探す、巡查でゆかぬ時はまた外の人に尋ねる、何人でも合点の行く人に出逢うまでは
捕えては聞き呼び掛けては聞く。かくして漸くわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのはあたかもこの方法によらねば外出の出来ぬ時代の事と思う。来るに來所なく去るに去所を知らず
というと禪語めくが、余はどの路を通つて「塔」に着したかまた如何なる町を横ぎつてわが家に帰ったかいまに判然し
ない。どう考えても思ひ出せぬ。ただ「塔」を見物しただけは慥かである。「塔」その物の光景は今でもありありと眼に浮
べる事が出来る。前はと問われると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。ただ前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく
明るい。あたかも闇を裂く稲妻の眉に落ると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焼点のようだ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。過去という怪しき物を蔽える戸帳が自ずと裂けて龕中の幽光を
二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流れが逆しまに返つて古代の一片が現代に漂い来れりとも
見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に残り残されたるは倫敦塔である。

この倫敦塔を塔橋の上からテムス河を隔てて眼の前に望んだとき、余は今の人が將た古えの人かと思ふまで我を忘れ
て余念もなく眺め入った。冬の初めとはいいいながら物静かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜたような色をして低く塔の
上に垂れ懸っている。壁土を溶し込んだように見ゆるテムスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いているかと思
われる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつまでも同じ所に停
っているようである。伝馬の大きいのが二艘上つて来る。ただ一人の船頭が艦に立つて櫓を漕ぐ、これも殆んど動かない。
塔橋の欄干のあたりには白き影がちらちらする、大方鷗であろう。見渡したところ凡ての物が静かである。物憂げに見え
る、眠っている、皆過去の感じである。そうしてその中に冷然と二十世紀を輕蔑するように立っているのが倫敦塔である。
汽車も走れ、電車も走れ、いやしくも歴史のあらん限りは我のみはかくてあるべしといわぬばかりに立っている。その偉
大なるには今更のように驚かれた。この建築を俗に塔と称えているが塔と云うは単に名前のみで実は幾多の櫓から成り立
つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形状はあるが、いずれも陰気な灰色をして前世紀
の記念を永劫に伝えんと誓える如く見える。九段の遊就館を石で造つて二、三十並べてそうしてそれを虫眼鏡で覗いたら
あるいはこの「塔」に似たものは出来上りはいまいかと考えた。余はまだ眺めている。セピア色の水分をもつて飽和した
る空氣の中にぼんやり立って眺めている。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻のご
とき過去の歴史をわが脳裏に描き出して来る。朝起きて啜る淡茶に立つ煙りの寐足らぬ夢の尾を曳くように感ぜらる。
暫くすると向う岸から長い手を出して余を引張るかと思ひ、余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい
牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門まで馳せ着けた。見る間に三万坪に余る過去の一大磁石は現世に浮游するこの小
鉄屑を吸収しおわつた。門を入れて振り返つたとき、

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

憂いの国に行かんとするものはこの門を潜れ。

永劫の呵責に遭わんとするものはこの門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものはこの門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我が前に物なしただ無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。

この門を過ぎんとするものはいっさいの望を捨てよ。

という句がどこぞで刻んではないかと思った。余はこの時すでに常態を失っている。

問一 傍線部「見る間に三万坪に余る過去の一大磁石は現世に浮游するこの小鉄屑を吸収しおわった」とあるが、どういうことか。本文の文脈に即して説明しなさい。

問二 この場面から読み取れる語りや表現上の工夫について、本文の該当箇所を具体的に示しながら、あなたの考えを述べなさい。

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」 【国語教育専攻】

【共通E 近代文学（和田）】

問一 以下はある小説の冒頭部分である。この文章の語り方の特徴について説明したうえで、この部分がその後の展開に果たす役割を論じなさい。

「参謀本部編纂の地圖を又繰開いて見るでもなからう、と思つたけれども、餘りの道ぢやから、手を觸るさへ暑くもしい、旅の法衣の袖をかがけて、表紙を附けた折本になつてゐるのを引張り出した。飛騨から信州へ越える深山の間道で、丁度立休らはうといふ一本の樹立も無い、右も左も山ばかりぢや、手を伸ばすと達きさうな峰があると、其の峰へ峰が乗り、嶺が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間に唯一人我ばかり、凡そ正午と覺しい極熱の太陽の色も白いほどに牙え返つた光線を、深々と戴いた一重の檜笠に凌いで、恠う圖面を見た。」

旅僧は然ういつて、握拳を兩方枕に乗せ、其で額を支へながら俯向いた。

道連になつた上人は、名古屋から此の越前敦賀の旅籠屋に来て、今しがた枕に就いた時まで、私が知つてゐる限り餘り仰向けになつたことのない、詰り傲然として物を見ない質の人物である。

一體東海道掛川の宿から同じ汽車に乗り組んだと覺えて居る、腰掛の隅に頭を垂れて、死灰の如く控へたから別段目にも留まらなかつた。

尾張の停車場で他の乗組員は言合せたやうに、不残下りたので、函の中には唯上人と私と二人になつた。

此の汽車は新橋を昨夜九時半に發つて、今夕敦賀に入らうといふ、名古屋では正午だつたから、飯に一折の鮓を買つた。旅僧も私と同じく其の鮓を求めたのであるが、蓋を開けると、ばら／＼と海苔が懸つた、五目飯の下等なので。

（やあ、人参と干瓢ばかりだ。）と粗忽ツかしく絶叫した。私の顔を見て旅僧は耐へ兼ねたものと見える、吃々と笑ひ出した、固より二人ばかりなり、知己にはそれから成つたのだが、聞けば之から越前へ行つて、派は違ふが永平寺に訪ねるものがある、但し敦賀に一泊とのこと。

問二 以下の論の中で、筆者が最も重要な論点としているのはどういふ点だと考えられるか。その理由とともに分かりやすく説明しなさい。

言うまでもなく、大正という時代は、第一次大戦後の国威発揚を背景としつつ、明治以来の諸制度の矛盾が大眾の前に次々露呈されることで、それを「改造」しようとするおびただしい論議とともにあつたと言つていいでしょう。産業構造は、ようやく商工業から重工業へと転換し、それが金融資本のシステムによってあらたに再編されるとともに、戦争に伴ういわゆる「成金」現象も生まれていました。また普通選挙法と労働運動の昂揚や、大学令の改革による私立大学の昇格や婦人の権利への注目など、いわば経済・政治・文化にわたる諸制度が著しい変容のさなかにあつたことを思えば、「民衆を啓蒙」する必要性は、この森本に限らず誰の目にも明らかなことであつたのです。

その「啓蒙」に対応するのは、言うまでもなくジャーナリズムの発展です。それについて、川路柳虹は「文芸の特殊化と通俗化——通俗小説と今後の文壇」『新潮』大正四・六のなかで、通俗小説とは「文芸それ自身の問題と云ふより文芸とその読者の問題である」と明確に述べていました。いわゆる「読者」という問題がここに明確に浮上しています。それを言い換えれば「今日のジャーナリズムとコンマシャリズムとの結託」という新しい事態の到来であり、そのなかでは作家もまた「意識的に一つの作品の商品的価値を高めやうと心がける」とも言っています。この川路の論議は、批評的な希求でも要請でもなく、すでに事実上の認識と言つてもよく、そのことはまた「真珠夫人」が、「新聞」というメディアを通じて圧倒的に歓迎されたという背景が、彼の記憶にあるからです。

（日高昭二『菊池寛を読む』による）

研究指導	
教員名 ()	
受験番号	
氏 名	

受験番号	
------	--

二〇二五年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験 解答用紙
【専門科目】 【国語教育専攻】

【国語教育専攻】

「專門科目」

大学記入欄

選
択
()

↑

↑

← 裏面を使用する場合ここから記入すること

↑

↑ 11月6日

↑

研究指導	
教員名 ()	
受験番号	
氏 名	

受験番号

氏 名

修士課程 一般・外国学生入学試験 解答用紙

大学記入欄

共通
()

裏面に続く

← 裏面を使用する場合ここから記入すること

↑

↑ 12126R

↑